



驚いた由木は「これには私の知らない込み入った事情があったらしい」<sup>5</sup>と思い、さっそく関係者に事情を尋ねた。その結果『興亜讃美歌』は「太平洋戦争中、旧讃美歌委員会が教団の成立と同時に構成の母体を失って解消し、それを引きつぐべき教団内の讃美歌委員会がまだ組織されていなかったブランクの時期に、旧讃美歌委員会が委嘱したものだ」<sup>6</sup>ことを知る。さらに『興亜讃美歌』の発行時には「旧讃美歌委員会がすでになくなっていたので、やがて引きつがれるべき教団の教学局に頼み込み、教団讃美歌委員会の名で出版することにした」もので、「『興亜讃美歌』は名義上は教団讃美歌委員会編となっているけれども、実質的には同委員会と無関係であることがわかった」<sup>7</sup>という。

事情通の由木はこれで分かったかもしれない。しかし一般にはこれでは理解できない。そうしたなか、本稿筆者は従来紹介されてこなかった資料<sup>8</sup>の一綴と出会った。もとの所有者は小崎道雄。日本基督教連盟や旧讃美歌委員会で要職をつとめ、1941年の日本基督教団成立後は統理者代行、出版局長、東亜局長等を歴任した小崎が『興亜讃美歌』の発行準備時に出席していた旧讃美歌委員会の会議資料がそこに含まれていた。本稿はその資料を通して見えてくる『興亜讃美歌』編纂事情を紹介しつつ、当時の「時局」意識、出版統制下で賛美歌出版がおかれた状況、総力戦で賛美歌に求められた役割、中国占領地域での宗教工作との関係、旧讃美歌委員会が日本基督教団讃美歌委員会に引き継がれる際の問題、を考察する。

なお本稿では、「讃美歌委員会」という名称の、異なる2つの組織を区別するために、「旧讃美歌委員会」と「日本基督教団讃美歌委員会」という名称を便宜的に用いる。明治以来40年の歴史をもつ「讃美歌委員会」（旧讃美歌委員会）は、日本基督教団（1941年6月成立）に1943年5月に「讃美歌委員会」（日本基督教団讃美歌委員会）ができると解散した。この旧讃美歌委員会は、1941年6月の教団成立後、教団の讃美歌委員会ができるまでの約2年間、「迷い子のように」<sup>9</sup>なり存続した。この2年間に旧讃美歌委員会のもとで『興亜讃美歌』が編纂されたが、その発行日にはすでに旧讃美歌委員会は正式に解消。そのため、構成委員が異なる別組織である「日本基督教団讃美歌委員会」の「編」として発行したのである。

## 旧讃美歌委員会

日本初の共通讃美歌として有名な『讃美歌（明治36年版）』（1903年）が編纂される過程で、旧讃美歌委員会は誕生した。なお、共通讃美歌とは言っても、当時の日本のプロテスタント教会の全教派が出版に関わったわけではない。当時は、後の日本基督教団のような合同教会は存在しない。欧米、とくにア

5 由木康『讃美の詩と音楽』、前掲書、165ページ。

6 同上。

7 由木康『讃美の詩と音楽』、前掲書、165-166ページ。

8 古書店から持ち込まれた「戦時下基督教原資料＝讃美歌委員会定例会、讃美 一綴 基督教部宗教工作事業報告」と題された資料（フェリス女学院大学附属図書館所蔵、未整理）。以下の41点を含む：旧讃美歌委員会議事録（1942.09～1943.07）、委員会開催通知（小崎道雄宛）、月刊『讃美』（1942.09～1943.05）、『興亜讃美歌』採択候補歌詞案（ガリ版刷り歌詞集）、中支宗教大同連盟「基督教部宗教工作事業報告」（1942.12～1943.03）、中国各地の教会関係者から小崎道雄に送られた私信・教会資料等。うち主要なものを本稿末に資料として付し、その他も適宜本文中で紹介する。

9 由木康『讃美歌委員会史』前掲書、39ページ。由木康「自伝的な大正・昭和讃美歌史」『礼拝と音楽』vol.18, no.3（1972年）、9ページ。

アメリカの教会から宣教師が派遣され資金援助を受ける教会組織が日本に30以上存在した。そのうち『讃美歌（明治36年版）』の出版で中心的な役割を果たしたのは、日本基督教会、メソジスト教会、組合教会の3つで、この3教会の代表が委員会で発言力をもった。そこにさらに、他教会（バプテスト教会と基督教会〔ディサイプルス〕の2教会）からも委員が加えられ、結果として5教会（日本基督教会、メソジスト教会、組合教会、バプテスト教会、基督教会）による委員会が共通讃美歌を出版した。

旧讃美歌委員会の当初の目的は編纂作業だったと思われるが、『讃美歌（明治36年版）』出版後は、重版業務の監督や資金調達、利益分配、著作権管理を行う必要が生じ、「讃美歌委員会規定」<sup>10</sup>を制定したうえで委員会を再編した。同規程第2条には委員会の「職務」が規定されているが、1）「代表する教会、ミッション、又は教会或はミッションの協同せるもの、為に讃美歌の著作権を保有し、讃美歌諸種の出版事務に関し万般の監督及び統括をな」し、2）「諸教会もしくは諸ミッションに年報をなすべし而して右報告には売上代より得たる著作権所有者一定の所得及びその他の所得を添るべきものとす」の2項の記載しかなく、その他の職務の規定はない。収益の分配がとりわけ重要な関心事だったことがわかる。また実務を自分たちが行うのではなく統括することが委員会の職務だった。なお、同規定によると、発足当時の委員会は、教派ごとに次の人数で構成された<sup>11</sup>：

日本基督教会（3名）  
組合教会（3名）  
メソヂスト教会（3名）  
浸礼教会（2名）  
基督教会（1名）

この人数バランスから5教派の力関係が読み取れるが、それは1943年に旧讃美歌委員会が解散するまで40年間変らなかった。また1943年に解散するときの財産処分も、上記5教派に3：3：3：2：1の比で動産分配が行われている<sup>12</sup>。発足当時の役員は、会長：小崎弘道（組合教会）、書記：別所梅之助（メソジスト教会）、書記：マクネア（日本基督教会）で、5教派のなかの有力3教派から1名ずつ選出された。委員には各教派から幹部級の実力者が選ばれており、そこからも、実務の委員会というよりは、経営・管理のための役員会的な統括委員会だったことがわかる。

『讃美歌（明治36年版）』の売れ行きは好調だった<sup>13</sup>。販売にあたり教文館と警醒社の2社を売捌所に指定し、両社に取扱手数料を得させつつ委員会が収入を得る形をとっていたが、やがて教文館と警醒社に出版実務も委託し、両社を発行所に指定するようになる<sup>14</sup>。委員会は両社からの印税を受けとり管理・分配する会としての性格を強めた。同委員会の潤沢な収益に着目し、1926年には日本基督教連盟が賛美

10 由木康『讃美歌委員会史』前掲書、15-16ページ。

11 由木康『讃美歌委員会史』前掲書、17ページ。

12 本稿「資料2」参照。

13 1904（明治37）年4月1日の讃美歌委員会記録によると、教文館・警醒社から委員会が得た第1回決算時の純益は、教文館585円39銭、警醒社788円30銭だった（由木康『讃美歌委員会史』、前掲書、17ページ）。

歌発行の事業を移譲してほしいと申し出るが、結局移譲は行われず、1年分の賛美歌関連印税を委員会が連盟に寄贈し、連盟が売り捌いた『讃美歌』の取扱手数料を連盟に支払うことで着落したという<sup>15</sup>。

次の共通讃美歌である『讃美歌（昭和6年版）』（1931年）も、同じ5教派の旧讃美歌委員会で編集がすすめられた。編集の実務を担当したのは委員会外のメンバーで、歌詞担当の専門委員に由木康が、曲担当の専門委員に木岡英三郎が起用された<sup>16</sup>。この2名の専門委員は、月曜から金曜まで毎日出勤し、青山学院のハリス館で原案を作成、毎週金曜午後に常任委員と囑託が集まってそれを審議した<sup>17</sup>。編集作業は1928年6月に初年度予算（人件費・材料諸費含む）1万円で始まり、その後3年間継続<sup>18</sup>。また『讃美歌（昭和6年版）』の出版を機に、旧讃美歌委員会はひとつの重要な方針を決めた。それは、賛美歌の売り上げから生じる利益を、イ）賛美歌将来の改良のため、ロ）宗教音楽発展のため、ハ）一般伝道のため、に使用するということである<sup>19</sup>。このうちイ）とロ）に関しては実現したが、ハ）は実現しなかった<sup>20</sup>。このように、好調な売上によって得られる利益を将来に向けた賛美歌の研究・創作・普及に使うことを決め、その事業を委員会の重要な使命として位置づけたことは、後に『興亜讃美歌』のような国策対応の新しい賛美歌の実験を奨励することにもつながる。

『讃美歌（昭和6年版）』が出版された1931年は、柳条湖の鉄道爆破事件があった年で、以後15年にわたる戦争が始まった年である。未曾有の不景気が襲い、政党政治と財閥への不信感が強まるなか、軍部の発言が強まり、ファッショ的全体主義の傾向が強まった。中国での戦争が長期化するなか、1937年に第一次近衛内閣が国民精神総動員運動を提唱、「挙国一致」「尽忠報国」「堅忍持久」のスローガンが流行語化した。翌1938年には「東亜新秩序」の建設が標榜され、やがて「八紘一宇／八紘為宇」を理想とする「大東亜共栄圏」の構想に発展する。こうしたスローガンが繰り返し高調され猛威をふるったのがこの時代で、後に編纂される『興亜賛美歌』の歌詞は、こうしたスローガンのパッチワークの様相を呈することになる。流行語は巧みに大衆の心をとらえ、やがて感覚を麻痺させる。実体のない空虚な大言壮語が冷静な判断を失わせる。1938年には国家総動員法が制定されて国を挙げて戦時体制に入り、翌1939年に日本のキリスト教会のありかたを大きく変える宗教団体法が成立した。さらに1939年には日米通商条約が破棄され、1940年に日独伊三国同盟が締結され、1941年12月に日本は米英に対して宣戦布告する。

ここで、合同教会としての日本基督教団（現在とは異なる組織をもつ戦時中の文部省管轄下の教団）の成立の経緯について概観しておこう<sup>21</sup>。前述の宗教団体法（1939年制定、1940年4月施行）を契機に、

14 由木康『讃美の詩と音楽』、前掲書、20ページ。飯清「現行『讃美歌』成立までの歴史とその特徴」『礼拝と音楽』第44号（1985年）、5-6ページ。

15 飯清、前掲書、6ページ。

16 テー・エム・マクネヤ、別所梅之助『改訂 讃美歌物語』（警醒社、1933年）、148ページ。

17 由木康『讃美歌委員会史』、前掲書、29-30ページ。

18 飯清、前掲書、6ページ。

19 由木康『讃美歌委員会史』、前掲書、33-34ページ。飯清、前掲書、6ページ。

20 飯清、前掲書、6ページ。

21 詳しくは日本基督教団史編纂委員会編『日本基督教団史』（日本基督教団出版部、1967年）、日本基督教団宣教研究所教団史料編纂室編『戦時下の日本基督教団：1941～1945年』（日本基督教団史資料集、第2巻、第2編）（日本基督教団宣教研究所、1998年）、土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』（新教出版社、1980年）。



日本のプロテスタント教会は合同に向け動き出した。同法案成立後、宗教団体として認められるためには、規則文書を作成し、文部大臣に提出し認可されなければならなかった。各団体には統理者を置くことになり、その就任には文部大臣の許可が必要になった。宗教団体は文部大臣の監督下に置かれ、国体の秩序を乱すと判断された場合は処分・処罰の対象になった。同法の制定を受け、プロテスタント各教派は文部大臣の許可を受ける準備にとりかかるが、その過程で、許可のためには一定規模（教会数50以上、信徒数5,000人以上）が必要だという数を文部省から示される。条件を満たせる教派は7つしかなかった。にわかに教派の合同に向けた動きが具体化する。1940年8月、日本基督教連盟会長の阿部義宗の発議で有志談話会が開かれ、教会合同の問題が論じられると同時に、海外ミッションからの財政的独立の問題も論じられた<sup>22</sup>。9月に入ると、プロテスタント教会関連の諸団体の代表者の会合で、海外ミッションからの財政的独立が申し合わされ、さらに10月17日に皇紀二千六百年奉祝全国基督教信徒大会<sup>23</sup>を行い、そこで教会合同の宣言を採択することになった。この宣言採択で日本のプロテスタント諸教派（34団体）の合同の意志が確認され、翌1941年6月24日、25日に富士見町教会で行われた創立総会（議長：阿部義宗）で、日本基督教団が成立した。教団統理者には富田満が選ばれ、その代務者に小崎道雄が就任。しかし成立した教団が文部大臣の認可を受けるためには、さらに教団の規則を文部省に提出する必要があった。急いで内容の調整が行われ、1941年11月に教団内で承認を得て文部省に提出、日米開戦前夜とほぼ同時期、1941年暮に日本基督教団は宗教団体として正式に認可された。

合同教会の誕生は、旧讃美歌委員会にとって深刻な意味をもった。特定の5教派が作った旧讃美歌委員会にとって、母胎となる教派の組織が失われることになったからである。これら5教派は、教団成立後ごく短期間だけ、教団内に「部」としてその組織を存続させた。しかしこの部制度も1年ほどで解消、各教派は独自の組織を保持できなくなる。母胎となる教派組織を失った旧讃美歌委員会は「迷い子」のようになった。新しくできた合同教会に次の讃美歌委員会を作ることも考えられたが、なかなか実現されず、結局1943年5月まで新しい讃美歌委員会が誕生することはなかった。

合同教会が成立した前後の時期の、旧讃美歌委員会の状況を見てみよう。1939年（会長：別所梅之助、主事：小河原虎三）の頃から賛美歌改訂の準備の声があがり、1939年2月に讃美歌特別委員会が設置された<sup>24</sup>。また、将来に向けた賛美歌研究誌『讃美』の発刊が決定され、1939年10月から毎月2,000部を発行することになった<sup>25</sup>。学生賛美歌<sup>26</sup>の編集も企画され、1939年9月以降、別所梅之助と木岡英三郎が

22 後者の問題については、米英と関係が深いキリスト教会へのスパイ嫌疑を否定する意味もあった。1940年7月31日、救世軍の幹部がスパイの嫌疑で検挙される。彼らはロンドン本部との関係を絶ち、軍隊式呼称を廃止するよう求められた。日本基督教連盟の幹部はこうした動向を憂慮、率先して海外ミッションと関係を絶つことを考えるようになる。

23 青山学院に全国から20,000人のキリスト者が集まり、午前中に礼拝、午後に祝会を行う。皇紀二千六百年を祝う熱心な祈りが捧げられ、教会合同の決意表明がなされた（当日の参加者数是由木康『讃美歌委員会史』[38ページ]では「約10,000人」だが、日本基督教団機関紙『教団時報』[1941年11月号]、『基督教年間：昭和16年版』[21ページ]、『日本基督教団史』[98ページ]では「二万人」）。

24 由木康『讃美歌委員会史』、前掲書、37ページ。

25 由木康『讃美歌委員会史』、前掲書、38ページ。

26 その後「使用範囲を広げるため」に『青年讃美歌』に改称（由木康『讃美歌委員会史』、前掲書、38ページ）。

週5日青山学院ハリス館で実務にあたり<sup>27</sup>、『讃美歌（昭和6年版）』から約100曲、『讃美歌』第二編から数曲、公募による新作約50曲を選んで、1941年4月に『青年讃美歌』<sup>28</sup>として刊行した。当時すでに用紙入手が困難になり始めていたが<sup>29</sup>、1939年度はまだ講習会等の主催・後援<sup>30</sup>は頻繁に行われ、賛美歌関連の研究奨励制度を設けて海老澤有道・木岡英三郎に奨励金を授与し、中田羽後の渡支援助金を支出するなど、賛美歌の収益活用も活発に行われていた。1939-40年度の委員は以下の通り<sup>31</sup>：

会長：別所梅之助 専務委員：阿部義宗

委員：ゲーリー（1940年度にアイグルハートに交代）、ダウNZ、ハナフォード、フィッシャー、  
小田信人、小崎道雄、齋藤忠郎、佐波亘、堀内友四郎、渡部元

主事：小河原虎三

1941年6月に日本基督教団が成立してからも、旧讃美歌委員会は約2年存続した。この時期、出版統制が厳しくなり、用紙不足は極度に深刻化した。用紙不足対応として『讃美歌時局版』<sup>32</sup>の発行が計画される。各種講習会は時局のために開催回数が激減し<sup>33</sup>、他団体の活動の助成も減った。創作賛美歌の研究誌『讃美』は順調に成長し、その延長線上に『興亜讃美歌』の出版が計画される。1941-43年度の委員は以下の通り<sup>34</sup>：

会長：渡辺元 専務委員：阿部義宗

委員：小田信人、岡崎五峰（1942年7月で辞任→谷本正に交代）、小崎道雄、齋藤忠郎、

27 『基督教年間：昭和16年版』（日本基督教連盟年鑑部、1941年）、77-79ページ。

28 讃美歌委員会編『青年讃美歌』（讃美歌委員会発行、教文館・警醒社発売、1941年）。

29 1939年9月の印刷製本工場火災で一時印刷製本がストップするが、応急の用紙手配、代用工場での作業で、クリスマス需要に対応するも、材料費高騰のため値上げは回避できなかった。新学用期の『讃美歌』の大量需要に向けて準備する際も、とくに表紙用の厚紙の入手が困難になった。『讃美歌（昭和6年版）』の1939年度の売上総数は52,924冊で、前年度比約30パーセント増だった（『基督教年間：昭和16年版』、前掲書、78-79ページ）。

30 1939.7.25-26基督教主義学校音楽教員研究会主催、1939.7.31-8.7九州各地巡回讃美歌講習会実施、基督教教育同盟会夏期学校後援、1939.11.20教職者讃美歌研究会懇談会開催（於青山学院神学部）、1939.11.20-25教会オルガニスト聖歌隊合唱指導者講習会開催、1939.11.25音楽礼拝举行（於東京ユニオン教会）等（『基督教年間：昭和16年版』、前掲書、77-78ページ）。

31 由木康『讃美歌委員会史』、38ページ；『基督教年間：昭和16年版』、前掲書、143ページ。

32 「時局版」の名称から戦意高揚を目的とした歌集のような印象を与えるが、実際には用紙不足対応の歌集としての性格が強かった。

33 例外的に大規模に行われたものに、1942年10月5日の仙台講習会がある。「十月十五日午後六時より仙台讃美歌研究会主催、讃美歌委員会後援の青年讃美歌新曲発表会、宮城女学校講堂にて開催され、会衆千五百名余、出演六学校一団体に及べり。本委員会派遣安部、岡本両氏の合唱指揮、独唱、会衆音楽指導、小河原主事の挨拶ありし外、前日十四日夜には各学校音楽教師、宗教主事、市内各教会牧師の讃美歌懇談の夕の開催あり、出席二十名に及べり」（『昭和十七年十一月讃美歌委員会定例会記録』、フェリス女学院大学附属図書館所蔵、未整理）。

34 旧讃美歌委員会記録、フェリス女学院大学附属図書館所蔵、未整理。一部を〔資料1〕に筆耕掲載。

原田友太、日高善一、比屋根安定、別所梅之助、山北多喜彦、山本喜蔵

主事：小河原虎三

この委員構成からわかることは、時局を反映してかつて委員の半数をしめた外国人委員がいなくなったこと、また「委員が大部分教派政治にかかわった有力者たちであって、音楽家や讃美歌専門家がほとんどいなかった」こと<sup>35</sup>、そして音楽家を含める発想がなかったと思われることである。かつての教派間のパワーバランスは依然保たれた（日本基督教会3名〔原田、日高、山本〕、メソジスト教会3名〔阿部、比屋根、別所〕、組合教会3名〔岡部、小崎、齋藤〕、バプテスト教会2名〔渡部、山北〕、基督教会1名〔小田〕）。また、阿部義宗と小崎道雄という、当時の日本基督教連盟・日本基督教団で対中国宗教工作と大陸伝道の推進役が委員だったことは注目に値する。委員会の事務所はひきつづき青山学院のハリス館におかれ、実務は、主事的小河原虎三のもとで進められた。委員会は原則として毎月一度召集。この時期の旧讃美歌委員会の一歩の問題は、それが日本基督教団に組み入れられたわけでもなく、かといって特定の教派の監督下にもなく、法人組織としての形態をもたない単なる任意団体でありながら、過去からの遺産である『讃美歌』の在庫分売上金が潤沢にあったことだった。

### 『興亜讃美歌』編纂の背景

新しくできた合同教会である戦前の日本基督教団は時局に「即応」し、旧讃美歌委員会はそうした教団の姿勢に「即応」した。そうしたなか『興亜讃美歌』が生み出された。

日本基督教団は、成立直後から、天皇制国体に忠実で戦時目的に奉仕する宗教団体であることを積極的に示す。1941年8月、教団統理者富田満は、教団の使命についてこう宣言する：「伝道報国こそ教団に負はされた使命である。……神の言を以てこの非常時突破に処し得るやう国民を導くために献身せねばならぬ。福音に生きる事が最も君に忠、国に忠なる事を信じて、この時局に於て我等日本基督教団の信徒は捨身になって奉公して行くのである」<sup>36</sup>。また、教団の総務局長に就任したばかりの鈴木浩二も「基督者国民として我等はこの際国家の要請に応へ、臣道を実践し、大政に翼賛し、以て最良国民たるの自覚に愧ぢざるやうせねばならぬ」と訴えた<sup>37</sup>。その後、1941年12月8日に開戦の詔書が発せられると、翌日、統理者名で「重大時局に際し各教会に告ぐ」の示達があり、「隠忍今日に至りし我国は愈々米英両国と干戈を交へ、振古未曾有の輸贏を決するに立ち至った。……我等日本国民たる基督者は今次宣戦の意義を諒解し、国家に赤誠を捧げ国土防衛に挺身戮力するは勿論、進んで銃後奉公実践に万全を期し遺漏なからんことを期せねばならぬ」と公示される<sup>38</sup>。『興亜讃美歌』は、こうして示された教団の基本方針を直に歌集の項目に盛り込んでいく。

その後も教団の積極的戦時協力の姿勢は一貫した。1942年に文部省からの提出要請でまとめられた「日

35 飯清「現行『讃美歌』成立までの歴史とその特徴」『礼拝と音楽』第44号（1985年）、6ページ。

36 日本基督教団機関紙『教団時報』（1941年8月15日号）、1ページ。

37 同上。

38 『教団時報』（1941年12月15日号）、1ページ。日本基督教団宣教研究所教団史料編纂室編『戦時下の日本基督教団：1941～1945年』、前掲書、224-225ページ。

本基督教団戦時布教指針」では「大東亜戦争の目的遂行」「宗教報国」「日本基督教の確立」が綱領として掲げられ、さらに具体的な実践要目として「忠君愛国」「滅私奉公」「国民精神の昂揚」「堅忍持久」「質実剛健」「銃後挺身」などのスローガンが並んだ<sup>39</sup>。1941年12月の開戦後、約半年間は、香港、シンガポール、マニラを占領、さらにインドネシア、ソロモン群島、ビルマ、インド東部地域にまで作戦範囲を広げ、国民が勝利に沸いた時期があったが、その後1942年6月のミッドウェーで作戦失敗、ガダルカナルでの攻防も形勢不利に向かう。そうしたなか、1942年10月にこの「布教指針」が示された。戦況は明らかに不利だったが、その事実をひた隠し、なおも勝利に向かっていることを確認させる戦時布教指針だった。この「布教指針」が出された時期が、『興亜讃美歌』の編纂の時期と一致する。『興亜讃美歌』の歌詞は、上記スローガン満載。戦争は前線の兵士だけがするものではなく、文化・情報・宣伝・教育・宗教などを動員する総力戦であるとの意識のもと、賛美歌も武器として使われた。

教団はその後、「日本基督教団より大東亜共栄圏に在る基督教徒に送る書翰」（1944年復活節）<sup>40</sup>、「日本基督教団決戦態勢宣言」（1944年8月18日）<sup>41</sup>、などの文書を次々に発信する。また、そうした文書の発信だけでなく、具体的な行動や実践を通して戦時協力の姿勢を示した。富田統理者の伊勢神宮参拝（1942年1月）、教師錬成会（1942年6月以降）、国民儀礼実施の通達（1942年12月）、勤労報国隊の設置（1943年8月）、軍用機献納（1944年3月）等である。こうした戦時協力の理由については自己保身や官憲からの恫喝等も考えられるが、「その懸命ぶりや自発性を考えると、やはり天皇制イデオロギーが彼らの心情を溶解していた」<sup>42</sup>可能性も充分にある。また上記の「国民儀礼実施」「教師錬成会」「軍用機献納」の実践を要求された仙台東三番丁教会がそれをどう受け入れたか報告した川端純四郎は、それは心ならずも強制された「屈従」ではなく、むしろ心からすすんでおこなった「自発的服従」だったのではないかと指摘すると同時に、この問題は過去の問題として終わらない今につながる問題であることを指摘する<sup>43</sup>。

『興亜讃美歌』が編纂された時期の教団の動向のなかでも見逃せないのが、占領地域への宗教工作である。『教団時報』（1941年10月号）の一面記事「興亜宗教工作に就て」はこう始まる：「興亜宗教工作の問題が話題に上ってゐるが、これは東亜共栄圏の確立を目指すものに取っての大問題である。何となれば宗教は人心の奥深く入り込み、人間をその根底より揺動かす大なる力であるからである」。米英の宣教師によって育てられた中国のキリスト教会・学校・施設を日本側に取り込む工作が日本の教会に求められる重要な任務だと考えられた。同記事はこう訴える：「支那に於ては基督教が最も国民の信用を得てゐると聞く。……基督教に対する信用頼に加はり、上は知識階級より下は下層農民に至るまで侮り難い勢力となつてゐると云ふ。これが実情なりとせば、興亜宗教工作なるものは、少くとも支那に於て

39 日本基督教団宣教研究所教団史料編纂室編『戦時下の日本基督教団：1941～1945年』、前掲書、235-236ページ。「布教方針」全文は『教団時報』（1942年10月15日号）、5ページに掲載されている。

40 日本基督教団宣教研究所教団史料編纂室編『戦時下の日本基督教団：1941～1945年』、前掲書、316-326ページ。

41 日本基督教団宣教研究所教団史料編纂室編『戦時下の日本基督教団：1941～1945年』、前掲書、276-277ページ。

42 土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』（新教出版社、1980年）、358ページ。

43 川端純四郎「教会と戦争～仙台東三番丁教会の場合～」東北学院大学学術研究会『教会と神学』第52号（2011年）、173-189ページ。



丈けは基督教に対する工作に重点を置かねばならぬ」<sup>44</sup>。『興亜讃美歌』が編纂された時期の旧讃美歌委員会の専務委員だった阿部義宗は、この興亜宗教工作の中心人物だった。阿部は日本基督教連合の会長として、1942年1月に大陸の宗教事情の視察を行い、上海、南京、済南、青島、天津、北京、張家口を巡歴<sup>45</sup>。1月27日に帰朝報告会を行い、「長江一体はメソヂスト関係の教会、学校、病院等が多いので都合がいゝ。……今後支那でも、南方でも、基督教の担ふ使命が如何に重大であり、我等信徒が挺身奮闘せねばならないかといふことを泌々考へさせられた」と報告した。報告会の司会は、旧讃美歌委員会の主要メンバーで、のちに教団の東亜局長にも就任する小崎道雄だった<sup>46</sup>。

### 『興亜讃美歌』の編纂作業

このような時代の状況に「即応」して『興亜讃美歌』の編纂が決定された。旧讃美歌委員会は、1942年6月16日の定例委員会で「戦時版讃美歌を千五百円の予算を以て編纂すること。その編纂企画を比屋根委員に願ふこと。全編邦人作詞作曲を以て充すこと」<sup>47</sup>を決議している。7月2日には第1回の企画委員会を開催、次のことを決める：「1. 名称「興亜讃美歌」、2. 項目、3. 作詞依頼者（省略）、4. 編纂委員 渡部、別所、比屋根、宮川勇、木岡英三郎、小河原、他に作曲家二名」<sup>48</sup>。なお、「他に作曲家二名」とあるが、最終的に鳥居忠五郎と岡本敏明が選ばれた<sup>49</sup>。また、上記会議記録に「項目」とあることから、7月2日の段階で含める歌のテーマが決められていたこと、「作詞依頼者」とあることから、歌詞の公募は一応するものの実際にはあらかじめ依頼した人たちの詞で構成する構想があったことがわかる<sup>50</sup>。

『興亜讃美歌』の編纂が始まった1942年7月は、同時期に起こったホーリネス弾圧、教師錬成会を受けて、教団が「時局への即応」を宣言した時期だった。このうちホーリネスの弾圧事件は、1942年6月26日起こった。早朝、ホーリネス系教会の教師が検挙される。検挙の理由は、彼らの再臨信仰、ことに千年王国の信仰が国体の否定につながるというものだった。この事件は、旧讃美歌委員会を震撼させる。7月21日の同委員会記録に「去る六月二十六日の聖教会、きよめ教会に関する問題を考慮し時局版讃美歌原稿を再審せり。その結果、89、118、145、155、156、214、224、269、279、377、435、594、交読文26を除去せり」<sup>51</sup>の記録が見られる。この日削除が決まった賛美歌は、89番《ひさしく待ちにし メシヤよくだりて》、214番《ガリラヤのかぜ》（歌詞に「きたらせたまへ 主よみくにを」）、224番《むかし主イエスの》（歌詞に「地をばあまねく 御国とする」）、269番《かみはわがやぐら》（歌詞に「かみのくには なほわれにあり」）など。神の国の実現に言及した賛美歌だという理由からか《かみはわがやぐら》も「除去」の対象になっており、見せしめ弾圧に過敏なまでに即応する委員会の様子が見てとれる。

『興亜讃美歌』の編纂が始まった時期は、牧師を対象とする錬成会が始まった時期でもあった。「錬成」

44 『教団時報』（1941年10月15日号）、1ページ。

45 『教団時報』（1942年1月15日号）、3ページ。

46 『教団時報』（1942年2月15日号）、2ページ。

47 旧讃美歌委員会記録、フェリス女学院大学附属図書館所蔵、未整理。

48 旧讃美歌委員会記録、フェリス女学院大学附属図書館所蔵、未整理。

49 『興亜讃美歌』（警醒社、1943年）、「序」。月刊『讃美』（讃美歌委員会、1942年12月10日号）。

は文部省の造語で、「皇国民の錬成」という熟語として完全な表現となる<sup>52</sup>。教団の牧師を合宿させ、国から派遣された講師の講義を受けさせ、皇国民として精神を鍛えようとするものだが、教団はこれを歓迎した。第1回の教師錬成会（1942年6月1～6日）では、文部省宗教局長の阿原謙蔵が教団幹部を前に講演を行い、今後は「『純日本基督教』の建設を要望する」と強く要請する。その講演原稿は『教団時報』6月号に全文掲載され、教団側から「たしかに大なる示唆を与へられたものと信ずる」とコメントが加えられた<sup>53</sup>。これを契機に、「日本基督教」という言葉は、この時代の教団のひとつのスローガン化する<sup>54</sup>。また月刊『讃美』の1942年9月号には早速「日本讃美歌と創作の将来」と題された小河原虎三の文章が掲載される。この頃から「日本基督教」とセットにして「日本讃美歌」という言葉が使われるようになった<sup>55</sup>。

教師錬成会は『興亜讃美歌』にも直接影響した。第1回教師錬成会の直後、教団は時局に即応せる教

50 ほぼ同時期に日本基督教音楽協会が作られ、そちらで『興亜少年讃美歌』の編纂が行われることがきまる。旧讃美歌委員会の記録によると、日本基督教音楽協会が創立されたことを記念して1942年7月5日に音楽礼拝が行われ、旧讃美歌委員会は100円の補助金を出した。また、同協会が少年向けの賛美歌集を編纂する場合には、できるだけ便宜を与え、補助金も必要に応じて旧讃美歌委員会から支払うことを決定している。また、1942年8月17日～19日には日本基督教音楽協会が主催する形で、奥多摩鳩ノ巣で修養会が開催された（旧讃美歌委員会から300円補助）。この修養会のねらいは、音楽家たちを教団や旧讃美歌委員会が協力しつつ音楽職域奉公する組織に組み入れることで、会期中に、1）賛美歌作曲者と作詞者の協議（発題：宮川勇・山室武甫）、2）教役者と音楽家との礼拝に関する協議（発題：小崎道雄・中田羽後）、3）「日本讃美歌」の創作（司会：安部正義）、4）学校用聖歌教材の問題、5）日本基督教団と音楽の関係について（発題：小崎道雄〔教団出版局長の立場から〕、司会：木岡英三郎）のプログラムが組まれた。なお、この修養会の参加者の一人だった宇梶勝の作曲した《錬成の歌》（鮫島盛隆作詞）がその後『興亜讃美歌』に収められる。また、月刊『讃美』（1942年10月号及び12月号）における同協会に関する言及からは、同協会が音楽の専門家の結束のための組織であり、「日本讃美歌」の音楽面での推進のための組織と考えられていたことがわかる。同協会による『興亜少年讃美歌』では、安部正義（委員長）、草川宣雄、岡本敏明、木岡英三郎、中田羽後、川村信義、松田孝一、石丸泰一、宮川勇、小河原虎三が編集にあたったが、最後の2名（歌詞担当の協力者）以外は音楽の専門家だった。一方『興亜少年讃美歌』の作詞者について見ると、全85曲中宮川勇の詞のものが50曲もあるほか、小河原虎三の詞のものも9曲にのぼり、実に全体の7割の詞をこの2人だけで書いてしまっている。作詞についてはこの2人に依存する体制だった。なお、旧讃美歌委員会の残務会（1943年5月25日）の議題のなかに、「基督教音楽協会に事業基金贈呈の件」があり、旧讃美歌委員会は解散にあたり同協会に基金を贈呈していたことがわかる。

51 旧讃美歌委員会記録、フェリス学院大学附属図書館所蔵、未整理。

52 寺崎昌男、戦時下教育研究会編『総力戦体制と教育：皇国民「錬成」の理念と実践』（東京大学出版会、1987年）、5ページ。

53 『教団時報』（1942年6月15日号）、1ページ。

54 「日本基督教」という言葉は1942年6月の阿原講演以前からしばしば話題にのぼり人々の関心事になっていた。1941年12月には同志社大学教授魚木忠一が『日本基督教の精神的伝統』（基督教思想叢書刊行会、1941年）を出版し、『教団時報』が同書を絶賛・推薦する（1942年2月号）。なお、当時さかんに言われるようになる「日本基督教」というのは、明治以来日本人が受け入れてきたキリスト教から米英のカラーを払拭して日本的にするという「日本のキリスト教」とは異なり、日本人が、日本の精神風土を土台とした全く新しいキリスト教を樹立することを意味した。

55 月刊『讃美』の1942年9月10日号に「日本讃美歌と創作の将来」という文章が掲載される。また、同誌1942年10月号で小河原虎三は日本基督教音楽協会の使命について論じるなか、「日本讃美歌の創造進展」という用語を使用。

団の布教方針<sup>56</sup>というタイトルの文章を発表し、総力戦への協力を宣言する。そしてこの決意文章のタイトルで「時局への即応」という言葉が使われたのに呼応するかのように、同時期に編纂が始まった『興亜讃美歌』の序文にも「即応」という言葉が使われた：「興亜讃美歌は……この未曾有の時代に即応したる日本基督教徒の信仰を詠じたるものにして、時局版讃美歌と共に併用せられんことを望んで已まざるなり」<sup>57</sup>。この序文には「日本基督教」の文字も見られる。また、『興亜讃美歌』には《鍊成の歌》という新作賛美歌も収められたが、これもまさに時局に「即応」した歌のひとつだった。

『興亜讃美歌』の編纂にあたっては、歌詞の公募も行われた。若い人たちからの応募作品も「可成り多数」あったが、そこから「採用になり讃美歌集に収められたものは、必らずしも多くはな」<sup>58</sup>かったという。一方、作詞依頼をしてあった作家たちからも徐々に作品が集まり始めたことが、1942年8月29日に開催された第2回興亜讃美歌編纂委員会記録<sup>59</sup>からわかる：

「八月二十九日（土）午後三時よりハリス館にて第二回興亜讃美歌編纂委員会を開催し左記十七篇を採用せり。

大東亜共栄圏 賀川豊彦	大東亜建設 斉藤潔	全 宮川勇
支那伝道 別所梅之助	軍国の母の歌へる 錦織久良子	全 長谷川初音
大陸伝道 清水安三	海外伝道 小河原虎三	応召軍人を送る 宮川勇
臣道実践 関根文之助	白木の棺 別所梅之助	
(以上作曲依頼済)		
滅私奉公 山室武甫	職域奉公 宮川勇	開拓 別所梅之助
鍊成の歌 鮫島隆盛	銃後の家庭 山室民子	御墓まうで 山本喜蔵

なお、月刊『讃美』の小河原虎三の執筆記事に「作詞の初穂は当時の約束を実行して送って下さった賀川先生の大東亜共栄圏の歌である。当方よりの依頼状に折返し、速達便で別掲の歌詞を送ってくださった」<sup>60</sup>とあり、賀川豊彦がいち早く歌詞を提出したことがわかる。他方、愛国的な作詞に悩み依頼を断った作家もいたことが次の文章からわかる：「ある讃美歌作者は『祖国』の歌詞に就て二十年来苦しんでゐる。多くの試作を有してゐるが全部意に充たないからこのたびはお断りすると云ふ御返事に接し」<sup>61</sup>た。

1942年9月9日にも、旧讃美歌委員会の定例会が開催されたが、この日は『興亜讃美歌』について次の点を確認している。「時局版は更に交読文及英文索引を削去すること。尚興亜讃美歌は本集には収めざることゝす」「興亜讃美歌は既定方針通り単行本体裁発行とし、原稿料も既定通りとす」「興亜讃美歌作詞に就て／一人の作詞限度を三篇迄とし依頼、歌詞は成るべく採用する方針を以て予定／篇数の充足

56『教団時報』（1942年7月15日号）、1ページ。

57『興亜讃美歌』（警醒社、1943年）、「序」。

58 小河原虎三「讃美歌の将来」月刊『讃美』（1943年5月10日号）、1ページ。

59 旧讃美歌委員会記録、フェリス女学院大学附属図書館所蔵、未整理。

60 小河原虎三「讃美歌作詞 応募に於て」月刊『讃美』（1942年10月10日号）、1ページ。

61 同上。

を図ること。尚余裕あらば一項目二篇の作詞を得るやうにすること」<sup>62</sup>。当初は時局版に興亜讃美歌を収める案もあったことがわかるが、この日の会議で『興亜讃美歌』だけを切り離して単行本化することが決まった。歌詞原稿の公募は、その後も月刊『讃美』9月号<sup>63</sup>と10月号<sup>64</sup>に「歌詞再募集」の広告があり、引き続き再募集が行われたことがわかる。しかし10月5日の旧讃美歌委員会の記録では「興亜讃美歌々詞は大体予定の三十篇に達する原稿を得たり。作曲はその半数十五局約束済にて数日中に入手し得る予定なり」<sup>65</sup>の報告がなされた。最終的に出版された歌集を見ても公募で採用された作品は少なく、公募については満足のゆく結果が得られなかったことがわかる。そうこうするなか、10月20日の第3回編纂委員会では、新たに17編の詞の追加採用を決定し、これをもって歌詞の採用は打ち切ることを決めた<sup>66</sup>：

「興亜讃美歌は去る（十月）二十日開催の第三回編纂委員会にて新に採用歌詞十七篇を決定。  
前回に既に採用せるものを併せ三十三篇を得たるを以て一先づ歌詞の採用を打切ることゝせり。  
第二回採用歌詞左の如し  
南方伝道 本田清一。 応召軍人を送る 渡辺晋。 一億一心 白石保太郎  
傷痍軍人に対する感謝 (1)藤崎五郎 (2)白石保太郎。 臣道実践 長谷部俊一郎  
職域奉公 白石保太郎。 勤労奉仕 原田友太。 健民の歌 友井楨  
錬成の歌 長谷部俊一郎。 時局と女性 野見彰子。  
時局と青年 (1)藤崎五郎 (2)小河原虎三。 世界維新の歌 海老澤亮。  
興亜を祈る 豊田実。 日本伝道 由木康

上記の歌詞の採用結果を見ると、あらかじめ詞のテーマの枠組みが決められて作詞が委嘱されたことがわかる。テーマの枠組みは、前述の「日本基督教団戦時布教指針」などで実践要目としてあげられたスローガンを網羅している。また、上記のうち最終的に『興亜讃美歌』に収められなかった詞に、《勤労奉仕》（原田友太）、《健民の歌》（友井楨）がある。その後の編集作業のなかで不採用になったと考えられる。また、《錬成の歌》は上記採用結果では長谷部俊一郎の詞が採択されたとあるが、実際に出版されたときは鮫島盛隆による詞にさしかえられた。同様に《職域奉公》も白石保太郎の詞が採択されたとあるが、実際に出版されたときは宮川勇の詞にさしかえられた。差し替えの原因は不明だが、上記の詞の採用を決定したときの歌詞資料（ガリ版刷り）が残っているので<sup>67</sup>、最終的に没になった詞の内容は知ることができる。

62 旧讃美歌委員会記録、フェリス女学院大学附属図書館所蔵、未整理。

63 「歌詞再募集／興亜讃美歌集のため／形式自由／項目自由／民族と時代の意識に目醒めたものを求む／締切本月末日」

64 「歌詞再募集／興亜讃美歌集のため／教団成立、勤労奉仕、国防、健民、／一億一心、八紘為宇、時局と青年、／銃後の家庭、其他時局向／締切本月末日」

65 旧讃美歌委員会記録、フェリス女学院大学附属図書館所蔵、未整理。

66 同上。

67 旧讃美歌委員会資料、ガリ版刷り歌詞資料、フェリス女学院大学附属図書館蔵。



なお、『讃美歌（明治36年版）』以来の伝統で、旧讃美歌委員会では、日本語の讃美歌は「翻訳歌」か「添削歌」のいずれかの形で作ることが一般的だった。このうち「翻訳歌」は外国語の歌詞を日本語に訳すもの、「添削歌」は他の日本人の作った歌に手を加えながら完成していくもので、後者の場合、原形をとどめないほど変えられることもあったという<sup>68</sup>。『讃美歌（明治36年版）』のときは三輪源造や別所梅之助などが加筆添削を行った。一方、「青年讃美歌の歌詞は大体別所先生の加筆により整へられ興亜讃美歌はその添削を宮川勇先生に依頼した」<sup>69</sup>という。宮川の添削の度合がどの程度だったかは推測の域を出ないが、できあがった歌集の歌が画一的で、「時局用語」を含めることに主眼が置かれたかのような仕上がり<sup>70</sup>になっていることから、歌によってはかなりの加筆・修正<sup>71</sup>が行われたことが想像される。

『興亜讃美歌』『興亜少年讃美歌』の両方の編集委員だった宮川は添削をするだけでなく、さらに自作の詞を多数提供した。『興亜讃美歌』の場合、全36曲中7曲が宮川自身の詞による。一方、宮川は『興亜少年讃美歌』では85曲中実に50曲の詞を担当しており、不自然なまでに多い。宮川勇（1889-1945）は明治学院神学部卒業後、日本各地に伝道し、清水福音教会の牧師となる。賛美歌の歌詞については多作家で、『讃美歌（昭和6年版）』の歌詞公募の際には懸賞当選して7編の詞がおさめられた<sup>72</sup>。その頃からすでに日本的・愛国的な賛美歌の創作にとくに関心が高かった。そうした彼が年齢的にも、作風的にも、戦時下の時局賛美歌の創作において中心的な存在になった。なお、旧讃美歌委員会が解消するさ

68 「『讃美歌 [明治36年版]』」第一編には、誰の作といふ事を記さなかった。先輩の作にしても、誰のと定めがたいのもあり、それと知り得ても随分筆を加へたから、その人の名をしるしておいてよいか、どうか分からなくもあった」テー・エム・マクネヤ、別所梅之助『改訂 讃美歌物語』（警醒社、1933年）、144ページ。

69 月刊『讃美』（1943年4月号10日号）、1ページ。

70 たとえば次のような用語（戦中用語、皇室用語、神道用語、古代文学用語）が全編に計画的に配置される：「一億一心」「維新」「撃ちてしまむ」「英霊」「応召」「おほきみ」「大御稜威／御稜威」「おほやまと」「奥津城」「共栄」「軍国」「興亜」「時局」「醜の御盾」「銃後」「職域奉公」「臣道実践」「すめらぎ／すめらぎのみこと」「すめらみいくさ」「宣戦」「大東亜／東亜」「秩序／新秩序」「挺身」「八紘為宇／八紘一字」「日の本」「皇国（みくに）」「皇民（みたみ）」「聖業（みわざ）」「滅私奉公」「八潮路」「大和島根」「翼賛」「錬成」「渡津海」。『興亜讃美歌』に用いられたこうした用語の時代背景については石丸新『戦時下の教会が生んだ讃美歌』（いのちのことば社、2014年）参照。なお、同書によると、「皇国」を「みくに」と読ませることは1890（明治23）年の『童蒙讃美歌』からすでに行われており（石丸、129ページ）、また愛国的な表現の採用についても『讃美歌（明治36年）』にもすでに例があり、『興亜讃美歌』ではじめて採用されたわけではなかった。しかし1940年前後の「時局用語」をここまで満載したことは『興亜讃美歌』の特異な特徴である。

71 歌詞の修正については、1942年10月20日の第3回編纂委員会で採択が決まった時点での歌詞資料（ガリ版刷り）と『興亜讃美歌』として最終的に出版された時の歌詞を比較することによって、どのような修正がなされたかがある程度わかる。たとえば別所梅之助の詞についてはあまり変更の手が加えられていないが、いっぽう渡邊晋の《応召軍人を送る》の場合など大幅に修正の手が加えられている。その第4節はガリ版刷りの資料では「キリストのつはもの我等／きよき血をそゝぐは今ぞ／みいくさの先手をかけて／いさぎよく花と散らまし」だったが「愛の主はいくさに征く／ますらををめぐみ祝して／護りませかちときあげて／つつがなく帰るときまで」のように完全に書き換えられた。修正をした人物としては宮川勇がその可能性が高いが、あと、小河原虎三がそこに加わっていた可能性も否定できない。

72 海老澤有道『日本の讃美歌』（香柏書房、1947年）、130-132ページ。

いの財産処分では、宮川の『興亜讃美歌』における編集実務への謝儀として100円を支払い、また、宮川が『興亜讃美歌』のために作った短歌の謝礼として80円（1首につき20円）支払ったとの記録がある<sup>73</sup>。

『興亜讃美歌』に採用された作詞者名を見ると、『青年讃美歌』以来の常連が少なくない（小河原虎三、賀川豊彦、齋藤潔、白石保太郎、関根文之助、豊田実、長谷川初音、長谷部俊一郎、別所梅之助、山室武甫、由木康）。また、新しくできた日本基督教団の出版局の委員も作詞を依頼されている（由木康〔出版局参事〕、海老澤亮〔出版局主事〕、齋藤潔〔『新生命』副主事〕、賀川豊彦〔『新生命』編輯委員〕、錦織久良子〔『家庭婦人雑誌』委員〕、長谷川初音〔『家庭婦人雑誌』委員〕）。一方、旧讃美歌委員会編の賛美歌集に詞が初めて掲載された作者に、海老澤亮、鮫島盛隆（関西学院宗教主事；のちに「日本基督教団より大東亜共栄圏に在る基督教信徒に送る書翰」の公募で一位なしの二位入選）、清水安三、野見彰子（宮川勇長女）、錦織久良子、藤崎五郎（後にインドネシア派遣教師に選ばれセレベス島ボソに送られる）、本田清一（同じくボルネオ島バンジェルマシに送られる）、山本喜蔵（鳥居忠五郎義兄、宮川勇同窓）がいた。

『興亜讃美歌』には、本人の同意を得ずに収録された例もあった。第25曲の《日本伝道の歌》（由木康作詞、堀内敬三作曲）がそれで、これは10月20日開催の第3回編纂委員会で採用が決定され、ガリ版刷りの歌詞資料も配布された。しかし由木康によると「この歌は共同伝道東京部の依頼によって作り、堀内敬三氏が作曲してくれたもので、この歌集のために作ったものではない」<sup>74</sup>という。なお、由木自身は言及していないが、共同伝道東京部で歌われたときの楽譜（『基督教世界』に掲載）<sup>75</sup>では、第4節の歌詞の「平和の朝 遠からじ」だった部分が、『興亜讃美歌』では「勝利の朝 遠からじ」に書き換えられている。

歌詞素材が揃ったあと、作曲の依頼が行われた。しかし1942年12月9日の旧讃美歌委員会の会議記録に「『興亜讃美歌』は作曲家多忙のため予定通り進捗せず、冬休み後に非ざれば作曲原稿を揃へること不可能と思はる。作曲家諸氏は年末に近県に会合し完成される予定なり」とあり、7月に日本基督教音楽協会を設立したあと音楽家を結束して職域奉仕に動員することは容易でなかったことが察せられる。こうした作曲依頼と並行して『興亜讃美歌』の発行所を検討する特別委員会が立ち上がり、1942年11月2日の旧讃美歌委員会で、その検討を渡部元、日高善一、齋藤忠郎、比屋根安定に一任することが決まった<sup>76</sup>。

## 小河原虎三と「日本讃美歌」論

宮川勇だけでなく、小河原虎三も『興亜讃美歌』の内容に大きな影響を与えた。ところがこの小河原については不明な点が多い。彼について言及した数少ない文献のひとつである海老澤有道『日本の讃美歌』<sup>77</sup>によると、「（小河原は）同志社神学部を卒業後、各地に伝道、一九三九（明治十四）年来、讃美

73 1943年5月25日旧讃美歌委員会残務会記録、フェリス女学院大学附属図書館所蔵、未整理。

74 由木康『讃美の詩と音楽』、前掲書、166ページ。

75 『基督教世界』（1941年5月15日号）。

76 旧讃美歌委員会記録、フェリス女学院大学附属図書館所蔵、未整理。

77 海老澤有道『日本の讃美歌』（香柏書房、1947年）、100ページ。

歌委員会書記として『讃美』の編輯に『青年讃美歌』の編輯に貢献、多くの讃美歌に関する論考、或は創作を『讃美』誌上に発表」とある。海老澤は同書で賛美歌作者を紹介するさい生没年を示すことが多いが、小河原の生没年の記述がない。また戦争中は作詞者・賛美歌事業推進者として活躍した小河原だが、彼の戦後の活動の記録がみあたらず、忽然と姿を消したかのような印象がある<sup>78</sup>。

小河原は3つの顔をもって活動した。そのひとつが詩人（賛美歌作家）としての顔である。『青年賛美歌』の新曲の部（104-157番）の53曲中、第106番《自然》、第111番《収穫》、第152番《キャンプ》、第157番《ハイキング》の4編が小河原の詞による。詞は、別所梅之助の薫陶を受けたとおもわれる美文調で、和歌や俳句の伝統をいかしつつ、自然や四季の移ろいを愛でつつ神に祈るという内容。愛国的な表現はほとんど見られず、第111番の第3節に「くにの護りぞ いざはげめ」という表現が見られる程度だった<sup>79</sup>。ところが『興亜讃美歌』になると作風が激変する。同歌集では、全36曲中、第20番《時局と青年》<sup>80</sup>、第26番《海外伝道》<sup>81</sup>の2編が小河原の詞による。詞は『青年讃美歌』の時とは一変して、戦時歌謡と変わらない宣伝歌で、賛美歌的表現はほとんど見られない。興味深いのは、『興亜賛美歌』とはほぼ同時期に作られた『興亜少年賛美歌』におさめられた小河原の詞である。同歌集では、全85曲中、第7番《わが日本》、第21番《夕の歌》、第25番《ひなどり》、第29番《愛の蕾》、第40番《幼児と自然》、第42番《いざ歌へ》、第51番《復活》、第53番《花咲く頃》、第56番《めぐみの花》の9編が小河原の詞による。このうち第7番《わが日本》はそのテーマ設定ゆえ愛国的表現がみられるが、戦時色は感じさせない<sup>82</sup>。またこの1編以外の8編は戦時色もなく、愛国的表現もなく、小さきものの世界に向けられる小河原のやさしい眼差しを感じさせる<sup>83</sup>。おそらくこちらの作風こそが小河原の詩人としての本来の姿だったのだろう。

旧讃美歌委員会における小河原の立場のもうひとつが、月刊『讃美』の「編集人」としての立場だっ

78 月刊『讃美』1942年12月10日号に「日本基督教団の成立に伴ひ……小河原主事も出版局主事として、移って行くことに決められている」と書かれているが、教団出版局に移って活躍した形跡がみあたらない。

79 第111番《収穫》[小河原虎三詞]：「(一) あしたまだきに野らにいで／終日はげみ培ひし／労苦今日ぞ酬ひらる／  
歓喜あふれ主をあふがん；(二) 日毎夜毎の雨風の／しげき憂ひも今は晴れ／つきめ歓喜野にみちぬ／ほめうた  
高く主をたたへん；(三) 黄金波打つ八束穂に／利鎌をいるる若人よ／剣とる手に鎌とるも／くにの護りぞいざ  
はげめ；(四) 秋の実のりをとく収め／老いも若きもうちつどひ／天地治す大神に／初穂ささげて祝はばや」

80 第20番《時局と青年》[小河原虎三詞]：「(一) 遠つ父祖より享けつぎし／正義の血潮高鳴りて／若人の起つべき  
秋ぞ来りたる／いでや我等はひとすちに／炎の道も衝きてゆかん；(二) 天つ日嗣の大御稜威／国の内外に照り  
わたり／若人の榮ある道はかがやけり／東亜率ゐる意気に燃え／御神と偕に進みゆかん；(三) 国の興れる大御  
代に／生れし身こそ幸なれや／大君の御盾のほまれ身に負ひて／大きアジヤを築くべく／御神を仰ぎ勇みゆかん」

81 第26番《海外伝道》[小河原虎三詞]：「(一) のぼる朝日の旗風に／東亜の空の雲晴れて／アジヤの種族十億が／  
ひとつにむすぶ朝はきぬ；(二) 日いつる国の御民われ／神に召されしよろこびを／いかでここに秘めおかん／  
八潮路こえて伝へばや；(三) 馴鹿群るる北国も／椰子の樹しげるみんなみも／すくひを求め呼ばふなり／疾く  
伝へばや主のをしへ」

82 第7番《わが日本》[小河原虎三詞]「(一) 荒波はゆる大海に／くれなゐもゆる朝日影／闇をば照らすみひかり  
の／きよけき姿かわが日本（やまと）(二) 真白き雲をいただきて／雲井に立てる富士の峰／ひじりの如く汚れなき／  
けだかき姿かわが日本；(三) のどけきひかりさしそひて／野山に匂ふさくら花／天なるみくに偲ばする／あかるき姿  
かわが日本」

た。小河原は同誌の主筆として一連の賛美歌論を発表した。月刊『讃美』1942年9月号の巻頭論文「日本讃美歌と創作の将来」は無署名ながら文体などから小河原の文章と思われる。そこでは、最近「日本基督教」論が盛んだが、敵国の賛美歌が使えなくなった今、賛美歌においても「日本讃美歌」の樹立が必要であることが説かれる<sup>84</sup>。さらに同誌1942年10月号には、小河原の署名による巻頭論文「日本讃美歌の創造発展」が掲載される。そこでは、諸外国の文化からさまざまな恩恵を受けてきた日本だが、今や大東亜戦争の時期を迎え、戦時体制下で教会が職域奉公しようとするとき、新しい日本讃美歌が必要であるとしたうえで、「大東亜共栄圏の指導者たる我々日本人は祖国の伝統を無視してはならない。……偉大なる日本人の伝統に培はれた、新しき讃美歌の苗木を東亜共栄圏に移植すべきである」<sup>85</sup>と論じた。

『興亜讃美歌』が完成に近づく時期になると、小河原の賛美歌論はさらに熱を帯びる。月刊『讃美』1943年1月号の巻頭論文「大東亜戦争と讃美歌の問題」では、今時の戦争が思想戦でもあり日本基督教の樹立が必要であることを次のように訴える：「大東亜戦争は武力の血戦に止らず経済戦、思想戦が極めて重大である以上銃後の国民も、日々を見えざる戦線の第一線に身を曝してゐるのである。敵の戦力を壊滅して、勝利の戦力を強大にしてゆくためには、単に従来の米英思想を遠慮して居る程度では目的を達成し得ない。米英思想の根源を除去して燦たる日本精神、日本の世界観を我が基督教の中に発見しなければならない」<sup>86</sup>。同誌1943年2月号では、『興亜讃美歌』について「本集は日本的讃美歌へ、又皇国世界観による讃美歌への試作の一步を踏み出したのである」との認識を示す<sup>87</sup>。さらに同誌1943年3月号では、時局にふさわしい賛美歌について「大東亜戦争下、時局に相応しい、力強い讃美歌が生れなければならない。讃美歌とはセンチな音楽であるとの明治、大正時代の一般人の誤った認識を改めさせなければならない。淋しい、悲しい感情方面を表はした作はもう沢山である」とまで言うまでになった<sup>88</sup>。このように論陣を張りながら『興亜讃美歌』の編集作業が同時にすすめられた。

旧讃美歌委員会における小河原のさらにもうひとつの立場が、同委員会の「主事」としての立場だった。小河原は詩人であり論客でもあったが、また出版業務を監督する責任者でもあった<sup>89</sup>。とくに出版統制が強化されるなか、用紙を確保し、出版を可能にすることが小河原にとって重要課題だった。事態は深刻だった。1940年12月に日本出版文化協会が設立されて以来、用紙の配給や出版物の企画調査が行

83 第25番《ひなどり》[小河原虎三詞]：「小雨にぬれた親つばめ／軒端をかすめ飛んでゐる／可愛いひながおくちを／そろへて待つてゐやう；(二) さへづりうたふ揚雲雀／とべないひなを見まもつて／真上の空でビイチイ／ビイチイよんでゐる；(三) 高きにゐます神さまは／ちひさいものを見まもつて／やさしく強くよい子に／なれよとそだてたまふ」

84 無署名「日本讃美歌と創作の将来」月刊『讃美』（1942年9月10日号）、1ページ。

85 小河原虎三「日本讃美歌の創造発展」月刊『讃美』（1942年10月10日号）、1ページ。

86 小河原虎三「大東亜戦争と讃美歌の問題」月刊『讃美』（1943年1月10日号）、1ページ。

87 小河原虎三「興亜讃美歌の上梓に当って」月刊『讃美』（1943年2月10日号）、1ページ。

88 小河原虎三「讃美歌随筆：生むといふこと」月刊『讃美』（1943年3月10日号）、1ページ。

89 小河原が特別行為税についての交渉のために大蔵省主税局に特別行為税主任を訪ねて讃美歌を示しつつ説得をしたことの記録が1943年5月25日の旧讃美歌委員会残務回記録（フェリス女学院大学附属図書館所蔵、未整理）に残っており、そうした業務も彼の仕事であったことがわかる。



われたが、1942年3月には出版事業に対する軍官統制がさらに強化され、全面的発行承認制が導入された<sup>90</sup>。たとえ出版社が紙を確保できたとしても、出版物の内容がチェックされ、承認番号が得られなければ出版できなくなった。さらに1943年2月に出版事業令が公布されると日本出版文化協会は解散し、かわって日本出版会というさらに強力な統制団体のもとで出版事業が管理されることになった。

この日本出版会のキリスト教出版事業に対する態度は厳しかった。1942年度のキリスト教出版界について、日本出版会はこう批判する：「今日の祖国が直面している危機を全く没却し去ったかの如き抽象的平和主義の残渣を止めた伝道書がなほ平然として現れてくるのに対し、他方には、聖書の伝へる神の行為を我が国の古典の神々のそれに府会して解釈しようとする痴呆の便乗書をはじめとし、眼前的事態の困難さを正視することを避けて、粉飾的な擬態に依ってひたすら事態を糊塗せんとするが如き意力弱き書物の輩出を見た」<sup>91</sup>。こう厳しく批判したうえで、同出版会は、今後は「日本基督教」に関する良書が現れることを期待する：「基督者としての信仰の誠実を裏切ることなく日本人として生き抜く道を追求すること、課題は結局此所に掛つてゐる。既に目覚めつゝある二三の著者と共に、われわれは日本キリスト教の将来を此の一点から凝視せねばなるまい」<sup>92</sup>。日本出版会がそのような出版物を期待するというコメントを発表すれば、出版者側は当然そういう出版物でないと承認されないのではないかと考えるようになる。小河原が「日本基督教」「日本讃美歌」にこだわるようになる理由もそこにあった。

欧米の賛美歌が依然として含まれる『讃美歌時局版』の出版が難航した事情もそこにあった。1942年12月9日の旧讃美歌委員会記録<sup>93</sup>に「時局版は木岡、別所両氏の構成を了したるも本年度内の印刷は困難なり」とある。また月刊『讃美』誌上での広告も、1943年2月号と3月号では「来る三月下旬頃発売」だったものが、4月号では「来る四月下旬頃発売」、5月号では「来る五月下旬頃発売」と、ずるずる引き伸ばされる。出版の承認を得られない状況が続いていたと考えられる。なかなか出版できない理由について、小河原は月刊『讃美』で次のように説明した：「この時局版はも早や継続発行することが非常に困難であることを御諒解願ひたいのである。その理由は、本書の企画は大東亜戦争勃発前のものであり、第一、用紙割当が今日ほど激減するとは考へられなかったこと。第二に過半数を占める米英曲の使用が困難に直面するとは予測されなかった事等による」<sup>94</sup>。

『讃美歌時局版』の出版が難航する一方、『興亜讃美歌』は日本出版会の第1回の優良企画に入り、初版のみならず、再版の用紙まで約束された<sup>95</sup>。キリスト教出版界を厳しく批判することで、「日本基督教」関連の良企画を出すよう圧力をかけていた日本出版会から優良企画として認められたことは、小河原にとって複雑な気持ちだったろう。思いきり軍官統制の体制に擦り寄り企画を出すことで用紙配給を約束され、出版承認を得た。「主事」として出版事業を継続させるという意味では手柄であったかもしれない。しかし彼がのこした賛美歌作品を見る限り「詩人」としての小河原がどこまで喜んだかはわからない。

90 日本出版会監修、協同出版社編集部編『日本出版年鑑：昭和18年版』（協同出版社、1943年）、11ページ。

91 前掲書、22-23ページ。

92 前掲書、23ページ。

93 旧讃美歌委員会記録、フェリス女学院大学附属図書館所蔵、未整理。

94 小河原虎三「興亜讃美歌の上梓に当って」月刊『讃美』（1943年2月10日号）、1ページ。

95 小河原虎三「讃美歌の将来：用紙の特別割当」月刊『讃美』（1943年5月10日号）、1ページ。

## 宗教工作と『興亜讃美歌』

『興亜讃美歌』の企画は、占領地への宗教工作というコンテクストのなかで考えるべき側面ももっていた。軍隊が占領地を統治する際、被占領地住民が抵抗せず協力的になるよう、様々な方法で取り込む宣撫工作が行われたが、そうした工作のひとつとして宗教工作も行われた。とくに華中地域では1939年に中支宗教大同連盟が設立され、そこに神道部、仏教部、基督教部が設けられた<sup>96</sup>。当時の陸軍の内部文書「中支宗教工作要領」<sup>97</sup>によると、「各宗教徒ノ実践的活動ニヨリ民心ヲ把握ス」ること、そしてとくにキリスト教に関しては「漸次日本勢力ヲ注入シテ民衆ヲ日本依存ニ転換セシム」ことが基本方針として確認されている。欧米の宣教師が育てた現地の信徒を「日本依存ニ転換」させるため、日本基督教連盟／日本基督教団の力が「漸次注入」される。教団はそれを、中国に61万8010人、インドに266万6981人いるキリスト者への日本基督教の伝道と読み替えた（同時期の教団の信徒数は21万5141人）<sup>98</sup>。1941年1月の日本基督教連盟機関紙『連盟時報』には、新年の2大課題として「合同」と「大陸伝道」が掲げられている<sup>99</sup>。日本基督教連盟時代から行われた大陸伝道は、その後、日本基督教団にも継続された。1941年10月号の『教団時報』には「興亜宗教工作に就て」と題された文章が一面記事として掲載され、「興亜宗教工作の問題が話題に上ってゐるが、これは東亜共栄圏の確立を目指すものにとりての大問題である。何となれば宗教は人心の奥深く入り込み、人間をその根底より揺動かす大なる力であるからである」「支那に於ては基督教が最も国民の信用を得てゐると聞く」「興亜宗教工作なるものは、少くとも支那に於てだけは基督教に対する工作に重点を置かねばならぬ」<sup>100</sup>と訴えられた。とくに中国のキリスト教徒を欧米のミッションから切り離し「日本依存ニ転換」させる工作进行を推進した中心人物が、旧讃美歌委員会の委員だった阿部義宗と小崎道雄だった。中国から欧米ミッションの宣教師が撤退した後、それを引き継ぐ仕事が必要とされた<sup>101</sup>。

旧讃美歌委員会の専務委員だった阿部義宗は、1942年に中支宗教大同連盟の理事長に就任する。阿部の理事長就任後、同連盟の予算は増額され<sup>102</sup>活動が活性化した。阿部は、同じく旧讃美歌委員会の委員でもあった小崎道雄に話をもちかけ、日本基督教団からの特派として中国に派遣する。小崎は1943年1月1日に東京を発ち、中国を訪問して75日間に110の集会を現地で開き、各地で軍部高官、特務機関長、憲兵隊長、大使・公使・領事と回談を重ねた<sup>103</sup>。帰朝後、小崎は霊南坂教会の説教で「大東亜戦争により我が日本は二度と再び来らざる絶好の機会に今正に立って居る。一億一心此の好機を逃すべからず、

96 松谷曄介「日中戦争期における中国占領地域に対する日本の宗教政策：中支宗教大同連盟をめぐる諸問題」立命館大学社会システム研究所『社会システム研究』第26号（2013年3月）、49ページ。

97 原田熊吉「民衆指導工作諸規定送付ノ件」（アジア歴史資料センター）Ref.C04120655800 防衛省防衛研究所資料。

98 『基督教年鑑：昭和16年版』（日本基督教連盟年鑑部、1941年）、7ページ。

99 都田恒太郎「合同と大陸伝道：今年度に於ける二つの課題」『連盟時報』（1941年1月15日号）、1ページ。

100 『教団時報』（1941年10月15日号）、1ページ。

101 本稿「資料1」を見ると、1941年度に月刊『讃美』の売上は伸びを示し、しかも「本年度は特に外地並に大陸方面に進出著しきものありたり」という。

102 松谷曄介「日中戦争期における中国占領地域に対する日本の宗教政策：中支宗教大同連盟をめぐる諸問題」、前掲論文、68-70ページ。

103 小崎道雄「説教：日華精神提携の展望」『霊南坂』第62号（1943年4月号）、1ページ。

我等基督者はその信仰報国をなすべき時である」<sup>104</sup>と工作の意義を語っている。当時の資料が「戦時下基督教原資料＝讃美歌委員会定例会、讃美 一綴 基督教部宗教工作事業報告」と題された資料一綴（フェリス女学院大学附属図書館所蔵、未整理）に含まれる。そのうち、この中国特派事業を実施した中支宗教大同連盟の作成した報告書を「資料3」として本稿末に付す。このほか興味深い資料に北京の崇貞学園を発信住所とする小崎道雄あての書類があり、そこでは、東洋に生まれたキリスト教にその後西洋的要素が付着して「米英基督教」ができてしまったが、今こそ日本民族は天分の利をしてその不純物を除去して「日本基督教」を樹立し、さらにそれを中国にも広めて「東亜基督教」とすべきことが論じられている。その具体策として「東亜基督教研究所」を設立、今後は聖書・賛美歌の販売事業も北京で開始したいので販路確立に助力願いたいという依頼が小崎になされている。

当時のこうした一連の動きが『興亜讃美歌』の誕生にも影響したと考えられる。小河原虎三は1943年2月、阿部と小崎が中国で上記の工作を行っている時期に、月刊『讃美』誌上で『興亜讃美歌』の中国等での販路拡大について論じている：「内外地数十万の信徒の大東亜戦争下職域奉公強化のために日本的讃美歌の飛躍のために各教会で普く用ひられるやう祈って止まない。米英音楽の駆逐が叫ばれる今日、大東亜共栄圏の信徒への絶好の贈物は先づこの興亜讃美歌でありたいものである」<sup>105</sup>。小河原は、小崎の帰国直後の1943年5月には、さらに具体的に占領地での「宗教工作」に言及し、『興亜讃美歌』がそうした現場での需要に適したものであることに言及している：「音楽は文化工作の一部門として占領地に於て大いなる役割を果してゐる。文化工作に宗教音楽が用ひられるならば期待は更に大きい。比島に大陸に日本讃美歌の活躍すべき方面は甚だ広く、その期待にも図りしれざるものがある。興亜賛美歌、興亜少年賛美歌等大陸に於て、南方に於て盛んに歌はれる日を切に待ち望みつゝ、興亜賛美歌の第二集第三集の編纂を進めるのである。……創作讃美歌の歌声は大東亜共栄圏の国々に広がるであらう。……興亜讃美歌は慰問品としても絶好である。大いに利用し、戦地に送って頂きたい」。このように『興亜讃美歌』は一連の宗教工作との関係でも検討されるべき側面をもった歌集だった。

## 日本基督教団の讃美歌委員会へ

日本基督教団は1941年6月に成立したが、賛美歌事業の位置づけの決定に時間がかかった。1942年4月8日の教団の第15回教務会で初めて、賛美歌事業を出版局で行う方針が確認され<sup>106</sup>、その後総会に提案することが決まる。その動きを受けて、旧讃美歌委員会は1942年8月11日に帝国ホテルで財産処分に関する委員会を開催、旧5教派の会長または代表者と、委員会の常務委員との、懇談を行った（本稿「資料2」参照）。ここで、1）処分する財産の基準を1941年度決算〔本稿「資料1」〕におくこと、2）教団に譲渡する財産は在庫商品全部とすること、3）可処分の動産を、日本基督教会・日本メソジスト教会・組合教会に7,000円ずつ、バプテスト教会にその2／3、基督教会に1／3の額で分配することを決めている。この後1942年11月の教団総会で部制の解消が決まるが、その直前の、駆け込み決定だった。

1942年秋の部制解消を受けて、旧讃美歌委員会でも12月から部制解消にともなう旧讃美歌委員会の今

104 同上。

105 小河原虎三「興亜讃美歌の上梓に当って」月刊『讃美』（1943年2月10日号）、1ページ。

106 日本基督教団宣教研究所教団史料編纂室編『戦時下の日本基督教団：1941-1945年』、前掲書、262ページ。

後に関する検討を始めた。1942年12月9日の讃美歌委員会定例会は「部解消に伴う件」という議題で、午後3時から青山学院構内ハリス館で行われ、今後残務処理を行う期間を決定し、さらに文協会員権の扱い、委員会所蔵文献・蔵書・書類の今後の保管、各種著作権・謝礼・年末手当の支払いについて協議し、その後午後5時から会場を虎ノ門の晩翠軒に移して「恒例の通り晚餐会」を行って散会している<sup>107</sup>。また月刊『讃美』1942年12月号には、小河原虎三が教団出版局主事になるような記述も見られる：「今回日本基督教団の成立に伴ひ、讃美歌委員会は発展的解消をなし、教団出版局に合流することとなった。従って讃美歌に最も関係深かりし、青山学院の構内より、教団事務所<sup>108</sup>に移転することになり、近くその運びになるであらう。十年間ハリス館にて讃美歌の事業のたづさわって来た小河原主事も出版局主事として、移って行くことに決められている」<sup>109</sup>。

その後、1943年になって、教団でも賛美歌事業に関する動きがあった。そして、旧讃美歌委員会が教団出版局にそのまま「合流する」のではないかという上記の小河原の想定に反して、別の路線が選択されることになる。1943年2月10日に旧讃美歌委員会と教団出版局参事の懇談が行われ、さらに広範囲の意見の聴取が必要ということになり、3月1日に教文館で教会音楽関係者30人を招待し懇談会が開催された<sup>110</sup>。その後、3月23日に帝国ホテルで旧讃美歌委員会の解消にともなう記念の会が開催され、関係者60名が招かれて講演・会食・挨拶が行われたが、その席上、教団の富田統理は「讃美歌の事業は極めて大切であり、一日も早く新組織が確立されなければならないのであるが、慎重に考ふれば考へる程難かしい仕事である。然し延引を重ねることは許されないから、近く新組織の内容を発表し、事業にも着手する」と挨拶する<sup>111</sup>。しかしその後も新組織についてはなかなか発表されず、最終判断は統理者に一任されることになり、5月26日の教団教務会で、ようやく新しい讃美歌委員会の位置づけと委員が発表された。それによると、委員会は教団出版部のなかに位置づけることになり、委員には牧師4名（三吉務、勝部武雄、小崎道雄、渡部元）、作詞者4名（中山昌樹、比屋根安定、斎藤勇、由木康）、作曲者4名（草川宣雄、木岡英三郎、安部正義、岡本敏明）の計12名が選ばれた<sup>112</sup>。各教派の教会政治代表者の委員会ではなくなり、音楽家を新たに相当数加え、賛美歌の実質審議の委員会としての性格が強まった。

教団教務会で新委員が発表される前日の5月25日、旧讃美歌委員会は「残務会」と称して最後の会合を持っている（本稿「資料4」）。当日の会議資料にある「讃美歌委員会収支表」が「1942年度収支決算表」にあたるが、前年度（本稿「資料1」）と比較すると、賛美歌売上冊数の減少で教文館・警醒社からの収入が30%減少したものの、用紙印刷製本の支払いが75%減少したため、全体としては前年を約9,000円上回る繰越金（49,265円）を生じていることがわかる。またこの1年間、会議費・人件費・謝礼は前年よりむしろ増額し、賛美歌史編纂費用として別所梅之助には例年並の謝礼が払われていた。動産

107 旧讃美歌委員会資料、フェリス女学院大学所蔵、未整理。

108 東京都神田区錦町1-6 日本基督教団

109 小河原虎三「讃美歌改訂成る：時局版発行近し」月刊『讃美』（1942年12月10日号）、1ページ。

110 『教団時報』（1943年3月15日号）、6ページ。なお、由木康の記憶によるとこの日の参加者は20名（由木康『讃美歌委員会史』、前掲書、40ページ）。

111 『讃美』（1943年4月10日号）、1ページ。

112 由木康『讃美歌委員会史』、前掲書、40-41ページ。



の総額については、同時期に日本基督教団に財産移譲を行った日本日曜学校協会が約6,000円だったのに比べると<sup>113</sup>、旧讃美歌委員会は文字通り桁違いの預金・現金を持った状況で解消が決まったことになる。そしてこの預金・現金は、すでに決めてあったとおり（本稿「資料2」）、日本基督教会・日本メソジスト教会・組合教会にそれぞれ7,000円、日本バプテスト教会に約4,600円、基督教会に約2,300円の額で分配されたと考えられる。すると計算上はさらに14,000円近くの残額を生じたことになる。この残額処理については5月25日の残務会で結論が出たかどうかは分からない。しかし6月になってから旧讃美歌委員あてに発送されたハガキ（本稿「資料5」）に「尚当面の残務整理事務の進捗に就ては役員会にて処理仕度不悪御諒承の程御願申上候」とあること、また由木康<sup>114</sup>も飯清<sup>115</sup>も旧讃美歌委員会の最後の会計処理が不透明なまま終わったと指摘していることを考え合わせると、残額処理を一部の役員に一任したまま、旧讃美歌委員会は実質解消してしまったと考えられる。5月25日の最後の「残務会」は午後2時から青山学院ハリス館で行われたが、一定の審議の後、この日も午後5時から虎ノ門に会場を移して「御慰労のため晩翠軒にて晚餐会」を開催、旧讃美歌委員会はその歴史に幕を閉じた。

上述のように1942年春に賛美歌事業を教団内で行う方針が決められてから1943年春に実際に新しい讃美歌委員会が立ち上がるまでの1年間で、ぴったりそのまま『興亜讃美歌』の編集期間と一致する。由木康が1965年に『讃美歌委員会史』で『興亜讃美歌』にまったく触れていない理由もおそらくそこにある。旧讃美歌委員会がまさに「迷い子」になっていた時期に、小河原虎三や宮川勇らが勝手に編集した歌集という印象をもっていたのだろう。その『興亜讃美歌』は、奥付によると初版印刷5月29日、初版発行6月1日となっている。教団に新しい讃美歌委員会が初めて召集されたその日に初版印刷され、その翌日、旧讃美歌委員会が解消した最初の日に初版発行された。奥付に「日本基督教団讃美歌委員会編」と記されての発行だった。時局に過剰なまでに即応し、米英色払拭を実現して「日本基督教」「日本讃美歌」の確立をめざし、厳しい出版統制下に日本出版会から優良企画に選定され、総力戦で賛美歌に求められる役割をすすんで実践し、興亜宗教工作の一翼となることも視野にいれつつ、解消直前の混乱期

113 ただし日本日曜学校協会は土地・建物の財産が大きく、その額は207,726円だった（『昭和十六年度会計報告より財産目録』NCC教育部『教会教育の歩み』[教文館、2007年]、75ページ）。それに対して青山学院のハリス館に事務所を借りていた旧讃美歌委員会は不動産をもっていなかった。

114 「（旧讃美歌委員会の）役員たちは、委員会を教団に移譲する前に、その所蔵にかかる内外讃美歌文献を青山学院図書館に委託すると共に、その他いっさいの財産を処分することを決定した。その際、動産は、在来委員会の事業に寄与した人々に分配したとのことであるが、その総額や、だれにどれだけ割当てたかはわからない。……動産を分配したことは事実であるが、その詳細は不明である。これは讃美歌委員会の歴史にひとつの汚点を残したものであると言われても仕方がないであろう」（由木康『讃美歌委員会史』、前掲書、39-40ページ）。

115 「（旧讃美歌）委員会は収集した多くの内外賛美歌文献を青山学院図書館に『委託』した。この委託は『一時預け』であったのか『寄贈』であったのかは明らかではない。その他のいっさいの財産は処分すると決定したが、その際『動産は従前から委員会の事業に貢献した人々に分配』することになり、既に交代して辞任していた旧委員や旧専任者にもかなりの金額（当時の大学卒業生初任給の数か月分にも当たる）が配られ、このことは合同と戦争との混乱の中でうやむやにされ、表沙汰にはならなかったが、讃美歌委員会の歴史の中の大きな汚点であったことは確かである。ことに委員が大部分教派政治にかかわった有力者たちであって、音楽家や讃美歌専門家がほとんどいなかったことも記録にとどめておくべきかもしれない」（飯清「現行『讃美歌』成立までの歴史とその特徴」『礼拝と音楽』第44号（1985年）、6ページ）。

の旧讃美歌委員会のもとで短時間のあいだに完成された歌集だった。つまるところ『興亜讃美歌』は大東亜共栄を賛美する歌であって、キリスト教の信仰に基づく神への賛美の歌ではなかった。大陸伝道によって伝えようとしたのも、福音ではなく、日本の国体の本義と臣民の道だった。神への応答である賛美歌が国家への応答となり、しかも時流（時局）への即応となった点で、歌い継がれるべき賛美歌としての基本的な条件を満たしていなかった。小河原はこれを「試作」と位置づけ<sup>116</sup>、今後『興亜讃美歌』の第2編、第3編が新しい日本基督教団讃美歌委員会によって編纂されることを期待していたが<sup>117</sup>、その意志が継承されることはなかった。

（あきおか・よう）

フェリス女学院大学音楽学部教授

【資料1】旧讃美歌委員会1941（昭和16）年度事業報告・決算報告（フェリス女学院大学附属図書館蔵、未整理）

〔資料解説：1941年度、日本基督教団は成立したものの、部制解消が決まっていなかった時期の旧讃美歌委員会の活動状況・財務状況報告。用紙不足に対応して「時局版」発行が計画され、講習会等の主催・後援は激減した。委員は全員日本人になる。財務状況は安定、讃美歌の売上も増え、相当額の可処分動産があり、この1941年度の決算額をもとに5教派に分配されることになる。なお、資料には当日の会議出席者（小崎道雄か）の自筆書き込みがあり、これを〔 〕及び打消線で示す。〕

讃美歌委員会昭和十六年度報告 自昭和十六年五月十一日 至全十七年五月十日

一、出版事業報告

1. 出版統制機関として設置されたる日本出版文化協会に本委員会も第二種会員として入会することとなり、昨年五月より同協会の会員として出版事業に当りつゝあり。爾来用紙は同協会より配給を受け、割当量の用紙入手は容易となりたるも、割当量は毎期減少し、需要は益々増加する事情にあり、之が対策として、先ずB6版の発行を一時的に制限し用紙の節約を図ることとなれり。
2. 然れども将来の用紙不足並に需要増加に対しては右一時的措置にては到底調整不可能なるに鑑み、本委員会は昨年十月、実用を主とせる新讃美歌集の発行を企画し、讃美歌調整委員会を設け、之が編纂を依頼せり。本讃美歌集は、讃美歌時局版と称し、B7版三五二頁にして現行讃美歌及青年讃美歌新曲より約三〇〇篇を撰び専ら教会用及学校用に当てる目的を以て編纂せり。目下製版中にして初秋には発行の運びに至る予定なり。尚本集の発行に伴ひ、現行讃美歌は止むなく絶版〔一時〕となし、時局版のみを発行する方針なり。

二、普及事業

- （1）本年度は全国各地にて新曲講習会を開催する予定なりしも、時局のため、開催不可能となり、僅かに左の催しをなせり。
  1. 六月二十九日 東京基督教女子青年会講堂にて青年讃美歌を献げる会を開催 会衆、六〇〇名。近來稀にみる盛大なる教会音楽集会なりき。
  2. 日本日曜学校協会主催にて当地〔東京〕に開催されたる日曜学校教師養成講習会を後援し、昨年五・六月に亘り鳥居忠五郎氏を講師として派遣せり。
  3. 神戸市連合聖歌隊のクリスマス音楽礼拝を援助し、補助金を交付せり。
- （2）時局並に青年讃美歌編纂等の新事態により最近著るしく、昂まり来れる邦人創作讃美歌出現の要請に鑑み、又新曲の普及、創作の奨励等の具体方策につき、東京、大阪、仙台等にて讃美歌関係者と屢々懇談の会を開き、併せて時局版編纂の打合せをなしたり。

三、編纂事業

- （1）我国の讃美歌発達の全貌を明かにし、将来の発達に資すると共に、先人の功績を永く伝へむため、明治初期より現在に至る讃美歌の貴重資料の蒐集編纂を企画し別所梅之助氏を煩し、二ケ年〔半〕継続事業として編纂中なり。
- （2）讃美歌時局版を昨年十月より約半歳を費し、十四名の特別委員にて編纂せり。

四、特別事業

創作讃美歌の発表機関として、又讃美歌の普及、聖歌隊指導、聖歌隊楽譜提供等の使命の下に発行し来れる月刊「讃

116 小河原虎三「興亜讃美歌の上梓に当って」月刊『讃美』（1943年2月10日号）、1ページ。

117 小河原虎三「讃美歌の将来」月刊『讃美』（1943年5月10日号）、2ページ。

美」誌は小雑誌の発行、経営極めて困難なる時にもかゝらず、順調に成長し、全国に博く普及しつゝあり。本年度は特に外地並に大陸方面に進出著しきものありたり。

#### 五、発売冊数

本年度讃美歌発売総冊数は六八、八六四冊にして、前年度に比し、二五、八〇二冊の増加を示せり。

#### 六、委員役員

(会長) 渡部元、(専務委員) 阿部義宗、(会計監査委員) 齋藤忠郎、山本喜藏

別所梅之助、原田友太、小崎道雄、小田信人、岡部五峰、山北多喜彦

日高善一、比屋根安定 (順序不同)

本年度辞任委員 佐渡亘、R. H. フィッシャー、C. W. アイグルハート

本年度就任委員 山北多喜彦、比屋根安定、日高善一

#### 六 (ママ)、会計報告

##### 収入之部

一 本年度売上利益金	一五、五五〇・九三
一 青年讃美歌印税	二、六〇〇・〇〇
一 預金利子	一、一二一・五五
合計	一九、二七二・四八

##### 支出之部

一 委員会費	四四七・一二
一 事務費及室料	五〇一・七〇
一 人件費及謝礼	一、七一六・〇〇
一 普及費	一、五二三・九五
一 特別事業費	七七五・七二
一 讃美歌史編纂費	一、五七〇・三二
一 讃美歌時局版編纂費	一、一九七・一四
一 利益金	一一、五四〇・五三
合計	一九、二七二・四八
一 利益金処分左の如し	

本年度利益金の中、六、六八三円・七六を青年讃美歌償却金に当て、残金四、八五六円・七七を次年度繰越金とす。

#### 在庫品棚卸表 17.5.10

(省略)

#### 讃美歌委員会資産勘定表 17.5.10

科 目	借 方	貸 方
前年度繰越	42,345.35	
全 全 在庫品	7,893.24	
全 全 売掛金	2,000.-	
信託定期預金在高		25,705.88
当座預金在高		14,427.70
現金在高		155.80
売掛金残		2,252.65
在庫品残		21,237.09
青年讃美歌立替償却	6,683.76	
利益金	4,856.77	
(合計)	63,779.12	63,779.12

[財産]

#### 昭和十六年度予算支出表 17.5.10

(省略)

昭和十六年度 商品勘定表 16.5.11-17.5.10

科 目	収 入	支 出
前年度繰越在庫品		7,893.24
全 売掛金		2,000.-
印刷所洋紙店支払		45,467.54
教文館	25,151.20	
警醒社	21,664.60	
印税	2,600.-	
売掛金 教文館	2,000.-	
〃 警醒社	252.65	
在庫品残高	21,237.09	
星光返済金	812.-	
誌代収入	82.16	
倉敷料支払		287.99
商品益金	73,799.70	55,648.77
	73,799.70	18,150.93
		73,799.70

[上掲表の「教文館」「警醒社」の欄に会議出席者による赤鉛筆のアンダーラインあり]

損益勘定表  
(省略)



讃美歌委員会昭和十六年度収支決算表 16.5.11-17.5.10

科 目	収 入	支 出
前年度繰越	42,345.35	
教文館	25,151.20	
警醒社	21,664.60	
利子	1,121.55	
印刷所及洋紙店支払		45,467.54
事務費及室料		501.70
委員会費		447.12
人件費及謝礼		1,716.-
普及費		1,523.95
特別事業費		775.72
讃美歌史編纂費		1,570.32
時局版費立替支出		1,197.14
倉敷料		287.99
青年讃美歌印税	2,600.-	
星光返済金	812.-	
雑収入金（誌代）	82.16	
次年度繰越金	93,776.86	53,487.48
	93,776.86	40,289.38
		93,776.86

繰越金内訳（六口）

信託預金	10,229.87
〃	7,389.72
定期預金	4,086.29
当座預金	14,427.70
現 金	155.80
（合計）	40,289.38

【資料2】旧讃美歌委員会1942（昭和17）9月定例会記録（フェリス女学院大学附属図書館蔵、未整理）

〔資料解説：1942年夏頃の旧讃美歌委員会の動向をつたえる会議録。財産処分の話し合いがすすみ、日本基督教団には在庫を譲渡し、旧5教派には1941年度決算額をもとに動産の分配をすることが決められた。7月から始まった『興亜讃美歌』編集の進捗状況の報告も行われている。〕

昭和十七年第九月 讃美歌委員会 九月九日（水）午後三時 於ハリス館

一、前回記録 七月二十一日（火）午後四時より ハリス館にて開催

1. 日本基督教音楽協会主催の 七月十七・十八・十九日、奥多摩鳩の巣閣にて開催の基督教音楽指導者修養会を後援し金参百円を補助す。
2. 財産処分に関し母体各派の会長と懇談する件は阿部第二部会長の帰京をまって早速開催することゝす。
3. 次回委員会開催日を九月九日（水）午後三時よりとす。
4. 齋藤委員を銀行当座預金署名代理人に願ひ、小切手の振出の労を煩はし、会計委員の役目を分担して頂くことゝす。

出席 渡部、小崎、山北、原田、山本、小田、齋藤、別所 諸氏

事務報告

一、八月十一日（火）午前十一時より帝国ホテルにて財産処分に関する委員会を開催、五教派会長又は代表者と本会常務委員との懇談を遂げたり。

出席者 佐波、阿部、今泉、千葉勇五郎、千葉儀一（旧基督教会代表として）、渡部、齋藤、山本、小田 諸氏

1. 処分すべき財産の基準を昭和十六年度決算に置く。
2. 日本基督教団へ本委員会より直接譲渡すべき全財産を在庫商品全部とす。（去る五月の決算にては、二一、二三七円・二九なる旨報告）
3. 各母体教派にて受入るべき金額は日基、メソ、組合、各七千円、バプテストは七千円の三分の二、基督教会は七千円の三分の一とす。
4. 讃美歌委員会は残務処理費として残額を使用すること。約一万四千元。
5. 尚 母体分配金は無条件にて受くべきものなるも、各教派理事会に諮りその半額は讃美歌事業に当て得るやう、協議する旨、各代表者申合された。功労者の慰労金贈呈に就ては公正に決せらるゝやう希望あり、趣旨に賛成ありたり。

二、日本基督教音楽協会主催の基督教音楽指導者修養会は去る十七日より三日間、奥多摩鳩の巣園にて開催され、悪天候なりしも大阪、名古屋、横浜、東京、仙台、清水、の各地より出席十七名に及べり。当委員会より渡部会長、小崎委員（教団出版局長として）、小河原主事出席せり。よき懇談、修養の機を与へられ音楽家は讃美歌の将来に対する不安を一掃することを得、今後愈讃美歌普及と創作の事業に挺身すべく申合せをなし、小崎出版局長の指示に従ひ、教団との協力、音楽職域奉公に就て上申書作り、正式に教団統理者に具体方策を提出することゝなれり。

三、八月二十九日（土）午後三時よりハリス館にて第二回興亜讃美歌編纂委員会を開催し左記十七篇を採用せり。

大東亜共栄圏 賀川豊彦	大東亜建設 齋藤潔	全 宮川勇
支那伝道 別所梅之助	軍国の母の歌へる 錦織久良子	全 長谷川初音
大陸伝道 清水安三	海外伝道 小河原虎三	応召軍人を送る 宮川勇
臣道実践 関根文之助	白木の棺 別所梅之助	
（以上作曲依頼済）		
減私奉公 山室武甫	職域奉公 宮川勇	開拓 別所梅之助
鍊成の歌 鮫島隆盛	銃後の家庭 山室民子	御墓まうで 山本喜蔵

#### 協議事項

- 一、時局版の再検討に就て 附、新曲に対する希望に就て
- 二、興亜讃美歌の出版方法に就て 単行と合本 附 作曲謝礼
- 三、興亜讃美歌作詞に関する件
- 四、宮川勇氏 興亜讃美歌編纂委員謝儀に就て
- 五、時局版新曲の講習に就て
- 六、讃美歌外地供給と四六版（オルガン用として）に就て
- 七、今後の用紙対策に就て
- 八、次回委員会開催日

讃美歌委員会会計収支現況 17.5.11-17.9.5  
（省略）

次月繰越金内訳  
（省略）

#### 〔資料3〕（中支宗教大同連盟）基督教部宗教工作事業（1942.12.15～1943.3.31）報告書（フェリス女学院大学附属図書館蔵、未整理）

〔資料解説：旧讃美歌委員でもあった小崎道雄と阿部義宗が、1943年春に中支宗教大同連盟の基督教部の宗教工作に加わったときの報告書。このとき『興亜讃美歌』は編集作業の最終段階にあった。〕

#### 基督教部宗教工作事業報告

今般ノ工作ハ左記各項ノ如ク専ラ中支ニ於ケル中国基督教合同促進運動ニ従事セリ合同ノ主要ナル目的ハ中国基督教ノ自主的發展ヲ期スル共ニ従来約七十教派ニ分レテ多少対立的傾向ノアリシモノヲ一丸トシ大東亜ノ精神的文化的建設ニ寄与セシメントスルニアリ

且ツハ中国基督教百五十年ノ歴史ニ密接且ツ指導的立場ニアリシ欧米宣教師ノ退却セル後自立、自養、自伝ノ趣旨ヲ貫徹センガタメニ欧米的色彩ノ濃厚ナル教派意識ヲ芥除スルニアリ

一、期間 自昭和十七年十二月十五日至昭和十八年三月三十一日

二、工作員

- 1 工作専員  
小崎道雄（主トシテ地方） 阿部義宗（主トシテ上海）
- 2 同補助員  
古屋孫次郎（蕪湖、鎮江、揚州、南京担当） 中澤豊兵衛（杭州、嘉興、松江、常熟、崑山、蘇州担当）  
中山真多良（寧波担当） 松村導男（蚌埠担当）

末包敏夫（上海担当）

木田春一（上海担当）

### 3 全通説

潘錫安

### 三、訪問地

南京、蕪湖、鎮江、揚州、蘇州、太倉、常熟、崑山、杭州、嘉興、松江、蚌埠、寧波、漢口

### 四、講演及び集會回数並ニ延人数

一三七回 一七六五四人

小崎工作專員ハ合同促進ノ為三項目ノ如キ各地ヲ巡回ス

阿部工作專員ハ主トシテ上海ニ於テ基督教信者ノ有志ト小集會ヲ屢々催シ教會合同ノ推進力ヲ培養セリ其ノ間南京、蘇州、無錫、崑山ニ赴キ同地方ノ各教會ノ合同ヲ實現スルコトニ努メタリ

上海ニ於テ阿部工作專員ニ依ル集會回数

四四回

### 五、合同促進ニ関シナセル事業

#### 1 中華基督教出版協會設立

過般迄ハ各派ニ分レテ基督教ノ出版協會ヲ設ケ書籍新聞等ノ出版販売配布ヲナシ来リシモノヲコゝニ統一シ昭和十八年三月十二日中華基督教出版協會を設立シ文書ノ出版ヲ統一シ宗教ノ宣布ニ（ママ）兼ネ大東亞建設精神の部面ニ貢獻セシムルコト、セリ

#### 2 鍊成會

鎮江、杭州、蕪湖、蚌埠、南京、蘇州、無錫、揚州、

右ハケ所ニ於テ合同促進ノ為各派ノ牧師及長老ヲ召集鍊成會ヲ開催シ主旨ノ徹底ヲ期ス

### 六、華中中華基督教團結成ノ為地方的ニ行ハレシ合同左ノ如シ

#### 1 南京中華基督教團

二月二十八日莫愁路漢中堂ニ於テ約四百名会シ盛大ニ結成式ヲナス

職員名

理事長楊紹誠牧師、副理事長鮑忠牧師、書記馮光傑牧師、會計王世熙牧師、金海博牧師

理事陳裕華先生、邵仲香署長

監事郭書青會長、潘濟□牧師、周明懿先生

顧問黒田四郎牧師、永倉義雄牧師、阿部義宗會督

名譽監事井口保男先生、幹事王明德牧師

#### 2 蕪湖中華基督教團

一月二十三日八派ト二十四団体完全合同ヲナス

教團簡章第三條目的

本教團以連合蕪湖及付近基督宗教団体本博愛精神協力發展教會聖工與推進一切慈善事業完成教會自養、自立並實現東亞永久和平為目的

#### 3 皖北中華基督教團

二月二十三日蚌埠長老教會ニ於テ三百名会シ軍官民臨席ノモノ（ママ）ニ結成式ヲナス、今日ノ成果ノ裏面ニハ南京ノ黒田牧師屢々赴キ準備ヲナス

教團簡章目的ノ条

本會本基督福音連絡中華基督教各會力求教會自立促進教會合一提高教會水準發展教會聖工為宗旨（以下略）

#### 4 鎮江中華基督教會

三月二十一日長老會々堂ニ於テ合同結成式ヲナス、上松牧師ノ努力ト工作員屢々出張シ今日ノ合同ヲナセリ

簡章第三條目的

本會以連合各教會實行取消派別以遵照基督之吩咐發揚基督之真精神

#### 5 蘇州中華基督教會

一月十日市内十教會完全合同ヲ為ス現地喜田川牧師準備ノ為努力ス

### 七、有志ニ依ル合同左ノ如シ

#### 1 武漢地区中華基督教團

十七年十二月二十二日漢口ニ於テ重実、志村、片桐、小林ノ四牧師ノ努力ニヨリ數百名会シ軍官民臨席ノモトニ結成式ヲ盛大ニ催ス、尚三月十二日より十七日迄五日間小崎工作專員教團強化ノ為赴ク左ノ合同セシ教派名（八教派）

中華基督教會、循道會、中華聖公會、真耶穌教會、宣教會、行道會、福音□德會、安息日會

#### 2 九江支部（武漢地区基督教團）

三月十七日武昌片桐牧師數回ニ亘ハ（ママ）工作中ノ所九江各派合ヲナシ武漢地区基督教團ノ支部トナス

### 八、合同準備委員會を構成セシ地方左ノ如シ

#### 1 上海中華基督教聯合

合同促進ニ幾分ノ障害タリシ上海市ノ基督教各派ヲ先ヅ統一セシメ以テ中支ニ於ケル合同ヲ促進セントシタリ其ノタメ左ノ如キ上海基督教聯合會ノ設立ヲ助成シ三月六日其ノ發表式ヲ舉行シタリ

参加セル十四組ノ各派並ニ団体

一 中華聖公會 二 中華基督教會 三 中華浸體會 四 中華衛理公會 五 中華□工□ 六 中華安息日會 七 中華基督教自立會 八 中華基督教宗教教育□□ 九 中華基督教□□機 十 中華基督教男女青年會 十一 中華基督教社會事業□□ 十二 中華救世軍 十三 中華基督教合作機關 十四 中華基督教一般教育機關

- 2 嘉興 鍊成会モ開催シ其ノ後中澤氏担当準備ス
  - 3 揚州 工作ノ後鎮江上松牧師担当指導ス
  - 4 常熟 崑山ノ富田牧師担当指導シ四月上旬合同ノ予定
  - 5 無錫 蘇州の喜田川牧師担当指導シ四月上旬合同ノ予定
  - 6 松江 上海中澤牧師担当指導シ近ク合同ノ予定
  - 7 寧波 小崎工作専員一行赴キ数日工作ヲナシ日華協議会ヲ結成ス
- 以上

〔資料4〕旧讃美歌委員会残務会（1943年5月25日）記録（フェリス女学院大学附属図書館蔵、未整理）

〔資料解説：日本基督教団に新しい讃美歌委員会が組織され、旧讃美歌委員会が解消することになった1943年5月の残務会の記録。最終的に処分されることになった財産額が報告されている。〕

讃美歌委員会残務会 昭和十八年五月二十五日（火）午後二時  
協議事項

一、発売所契約に関する件

1. 警醒社より保証金（公債）二千円納入の申出ありし件
2. 教文館に無利子貸付の販路拡張奨励金二千円を回収する件

二、興亜讃美歌発表会の件

三、人事に関する件

1. 退職に関する件
2. 継続事業に関する件

四、財産処理剰余金に関する件

- 五、基督教音楽協会に事業基金贈呈の件 作曲版權に関する件
- 六、興亜讃美歌贈呈に関する件（作者及び全神学生）
- 七、神学部教室借用困難につきハリス館を使用する件（暫定的に）
- 八、讃美歌特別研究委員会解消に関する件
- 九、今夕残務処理につき懇談する件（旧委員会□払支出について）
- 十、阿部委員より借入の什器に関する件
- 十一、次回委員会に就て



讃美歌委員会収支表 18.5.10現在

科 目	収 入	支 出
繰 越	40,289.38	
教文館	15,674.05	
警醒社	12,625.68	
利子	901.76	
用紙印刷製本代		11,579.09
事務所費		653.38
委員会費		778.49
普及費		629.00
人件費及謝礼		1,880.00
特別事業費		583.95
誌代収入	79.32	
時局版編集費		605.90
興亜讃美歌編集費		1,751.87
讃美歌史編集費		1,455.00
倉敷料支払		387.58
	69,570.19	20,304.26
		49,265.93
	69,570.19	69,570.19

信託預金在高 22,390.99  
 当座預金〃 163.16  
 現 金〃 2.84  
 22,556.99  
 財産処理支出現金 26,708.94  
 49,265.93

〔資料5〕旧讃美歌委員会連絡ハガキ（1943年6月8日消印）（フェリス女学院大学附属図書館蔵、未整理）

〔資料解説：旧讃美歌委員に、日本基督教団に統理直属の新しい讃美歌委員会が5月29日に立ち上がったことを報告するハガキ。1943年6月に予定されていた残務会は中止、その後の残務整理は役員のほうで行うので悪しからず、の挨拶があり、最終的な残務整理がうやむやに行われた可能性がある。〕

拝啓 天恩の下弥々御清栄賀上候

扱て 本月十五日（6月15日）開催予定の残務打合せ会は今しばらくその開催を御延期頂きたる方好都合と存ぜられ候まま会計委員及主事とも相諮り延期致すことと相成候

尚当面の残務整理事務の進捗に就ては役員会にて処理仕り度不悪御諒承の程御願申上候 勿々

尚日本基督教団内に統理直属の讃美歌委員会、去る五月二十九日成立仕り候段本員会は仮に旧委員会と呼称致し度不悪御諒承願上候

渋谷区緑岡二二 青山学院構内ハリス館内  
 旧讃美歌委員会  
 会長 渡部元